

# NIEフォーラム

NEWSPAPER IN EDUCATION

---

2025 第4号

## 目次

### 実践報告

修学旅行での感動体験から戦争の記憶を伝える新聞制作学習

—表現力の育成を図りながら—

..... 藤井健太郎

1

# 修学旅行での感動体験から戦争の記憶を伝える新聞制作学習

—表現力の育成を図りながら—

On Newspaper Production Study to Convey Students' Memories of the War through Their  
Moving Experiences on School Excursions

—While Fostering the Ability to Express Themselves—

藤 井 健太郎

Kentaro FUJII

(環太平洋大学)

## 1 問題意識

本実践は、総合的な学習の時間（以下、総合的学習と表記）において、表現力の育成を図りながら、修学旅行での感動体験から戦争の記憶を伝える新聞制作に取り組む。それは、以下の2点に問題意識を持つからである。なお、感動体験とは柳井・皆川（2017）が定義する「複数の強い感情が生じ、心が動かされるような身体反応を伴う情動的反応」<sup>1)</sup>とする。

### （1）戦争の記憶を継承する社会課題

戦後80年が経ち、戦争を経験した人々は減少の一途をたどる。同時に戦争を知らない世代が増え、記憶の風化が危惧される。過ちを繰り返さないためにも、戦争の記憶を後世に伝えていくことが必要である。

こうした現状のなか、広島市は被爆体験伝承者や家族伝承者など養成事業<sup>2)</sup>を行い、戦争の記憶を継承する取組を推進する。戦争を知らない世代による継承活動である。しかし、これは被爆地や行政にかぎった問題ではなく、平和な社会の実現に向け誰もが考え解決すべき社会課題である。

また、教育のめざすところは、平和で民主的な国家及び社会の形成者としての国民を育成することである<sup>3)</sup>。そのためにも、学校教育を通じて戦争の記憶継承に取り組むことは意義がある。総合的学習では「現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」を探究課題とし、活動に取り組む

ことが例示<sup>4)</sup>されているが、まさに戦争の記憶継承は生徒の活動に値する課題である。そして、生徒が自己の生き方を考えられるようにする。

### （2）相手や目的に応じた表現力の育成

2000年代以降、国際的な学力調査の結果から、日本の児童生徒の思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題に課題があることが指摘されるようになった<sup>5)</sup>。その後、学習指導要領に育成すべき資質・能力として思考力・判断力・表現力等が盛り込まれ、育成に向けた様々な教育活動が展開されるようになった。その教育活動の一つとして、新聞制作に取り組む学校も多い<sup>6)</sup>。

総合的学習の学習指導要領解説にも探究的な学習の「まとめ・表現」の活動として、新聞制作が例示されている<sup>7)</sup>。ただし、相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりすることに配慮しなければならない<sup>8)</sup>。制作そのものが目的化し、単なる自己満足の成果物にしないためである。新聞制作において、相手や目的に応じた表現方法を考えさせることが必要であり、それが表現力を育成することにつながる。

## 2 実践構想

戦争の記憶継承という社会課題に対応した新聞制作に取り組むことをふまえ、図1の実践構想を立案した。

実践にあたり、情意面と技能面の2つの側面か

ら考えた。まず、情意面では戦争経験者の多くは凄惨な過去を経験してきた。そうした人々への心情理解が何より欠かせない。心情理解が深まることで、戦争の記憶継承という社会課題に対する当事者意識を醸成していく。そして、新聞制作への動機付けとする。技能面では、先に述べた相手意識と目的意識を明確にすることで、戦争の記憶がより読者に伝わる。生徒は社会課題と向き合い、誰に何を伝えるのか、何が目的であるか考え活動に取り組む。そして、それが表現力の育成を図ることにつながる。本実践は、情意面と技能面から実践に取り組んでいく。

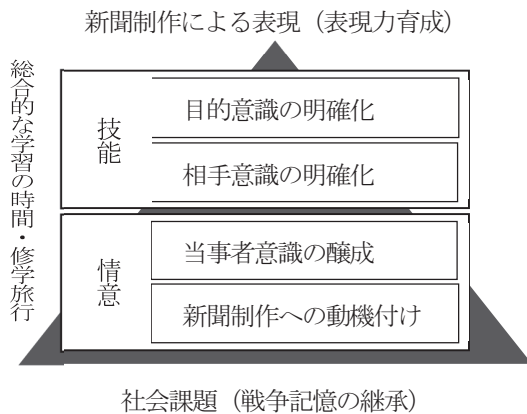


図1 実践構想図

### 3 指導計画

実践構想をふまえ、単元名を「戦争の実相を伝える新聞を制作しよう」とし、総合的な学習における指導計画を作成した。対象は中学3年である。

表1は指導計画であるが、実践構想で示した2つの側面から活動を考えた。おもに、活動Ⅰは情意面、活動Ⅱは技能面に対応する。活動Ⅰでは修学旅行と関連させ、生徒は戦争の実相について情報収集する。そして、活動を通して被爆者をはじめとする戦争経験者の心情に寄り添う当事者意識を醸成し、新聞制作への動機付けを図る。そこで、主となる活動として想像を巡らせながらの平和記念資料館（以下、資料館と表記）見学と被爆者の経験を追体験する講話を位置付ける。

活動Ⅱでは活動Ⅰを基盤とし、収集した情報をもとに戦争の実相を発信する新聞制作に取り組

む。新聞の主となる読者は1,2年生の生徒とし、制作に取り組む。また、その新聞を活用した発表会を位置付ける。発表会も1,2年生に向けて実施する。こうした活動を経ながら生徒に話し合わせ、目的意識と相手意識を明確にさせていく。特に、ポスターセッション形式での発表とするため、内容を象徴的に表す新聞名や見出しが鍵となる。そこで、新聞名と見出し表現を工夫させることを重点に指導する。

表1 指導計画（総合的な学習）

	活動内容と指導重点
活動Ⅰ (情意面)	(1) 戦争の実相を理解する情報収集 ①想像を巡らせた資料館見学 ②被爆者の経験を追体験する講話  (指導の重点) ・当事者意識の醸成 ・新聞制作への動機付け
活動Ⅱ (技能面)	(2) 戦争の実相を発信する新聞制作 ①新聞名と見出し表現の工夫 ②新聞を活用した発表会の実施  (指導の重点) ・目的意識の明確化 ・相手意識の明確化

### 4 実践内容

指導計画をもとに、実践に取り組んだ。以下に具体的な内容を述べる。

#### (1) 戦争の実相を理解する情報収集

勤務校（当時）のX中学校は、修学旅行で広島を訪問した。先に述べた資料館の見学と、被爆者による講話を行程に位置付けた。特に、資料館の見学は当事者意識を醸成させること。被爆者による講話は、新聞制作への動機付けを図ることに指導の重点を置いた活動となる。

##### ①想像を巡らせた資料館見学

資料館を見学するにあたり、事前学習において文献やインターネットを活用し、展示品について調べさせた。予備知識を持って見学することで、展示物への理解が深まる。それは当時の情景や人々の営みを想像することにつながる。

例えば、展示品のなかに焼け焦げた「三輪車」

がある<sup>9)</sup>。この三輪車で遊んでいる時に被爆した男児は、全身に大火傷を負い、その晩に亡くなったという。わずか3歳11カ月だった。こうした情報を有していることで、生徒は穏やかな一日の始まりが、一瞬にして悪夢の光景に変わったことに想像を巡らせた。当時の様子をより身近に感じ取り、幼子を奪われた家族の心情を慮った。

表2は見学後の生徒の感想である。下線部aからは、戦争を経験したすべての人々への心情理解が見られる。展示品の数々を通して、生徒は戦争が現在に通じる過去であり、市井の人々を巻き込むという当事者意識を醸成していった。

表2 資料館見学後の生徒の感想

資料館では、実際の物をさわってみたり、映像を見たりしました。戦争は人の命を奪うだけでなく、a生き残った人々の希望や夢もすべてなくなってしまうんだと思いました。

## ②被爆者の経験を追体験する講話

被爆者による講話は、語り部（以下、Aさんと表記）に依頼した。Aさんは被爆直後の様子と、その後の自らの人生を語った。静かな口調で淡々と語る当時の状況は生徒の想像を超え、驚きと悲しみ、憤りの感情に心揺さぶられた。

国民学校の1年生だったAさんは、登校後、教室で青い閃光と腹を突き刺す爆音と爆風に襲われた。頭や手足にガラス片が刺さり、流血しながら帰宅した。戦争によって家族4人を亡くす。その後も苦難は続き、被爆者であることを理由にいじめを受け、転校を余儀なくされた過去を語った。講話を聴きながら生徒はAさんの経験を追体験し、自らを重ね合わせながら当時の過酷な状況を理解していった。表3は生徒の感想である。

表3 講話後の生徒の感想

「原爆は人の心を変えてしまう」という言葉が心に残っています。私たちと同じくらいの人もたくさん亡くなり、今でも苦しんでいる人がいます。b戦争は二度と起こしてはいけないと思っただし、小さなことでも貢献できることはないかと思いました。

下線部bには、戦争を繰り返さないために自ら

貢献しようとする意欲が見られる。戸梶（2004）の調査では、感動体験によって動機付けへの効果が明らかとなっているが<sup>10)</sup>、広島での感動体験は生徒にとって戦争の記憶を伝える強い動機付けとなった。そして、戦争を繰り返すことのない平和な社会の実現に向けた意欲が喚起されていった。

## （2）戦争の実相を発信する新聞制作

活動Ⅱでは、戦争の実相を発信する新聞制作に取り組んだ。新聞サイズは壁新聞（B1判）とし、広島での感動体験を仲間と共有しながら協働制作することにした。その過程を通して指導点の目的意識と相手意識について考えさせていった。

### ①新聞名と見出し表現の工夫

まず、新聞制作の目的について学級全体で話し合う時間を設けた。表4は、その様子である。

表4 新聞制作の目的を話し合う様子（一部）

生徒ア：一番心に残ったのはAさんの話です。私の想像を超えた恐怖を体験されたことは下級生に伝えていきたいと思います。  
 生徒イ：私もAさんの話を伝えたいです。Aさんの話を伝えることで、1,2年生も戦争を二度と起こしてはいけない気持ちになると思います。  
 生徒ウ：僕もいま生きている人たちには、戦争のない社会を続けていってほしいです。それが新聞を作る目的になると思います。

表4の生徒たちは、被爆者による講話が強く印象に残ったようで、その内容を下級生に伝えていきたいという意見を述べた。そして、被爆者の体験を伝えることで「二度と戦争を起こしてはいけない」というメッセージの発信につながり、それが新聞制作の目的であると考えた。これ他にも原爆ドームの様子や資料館での見学を紹介し、戦争のない平和な社会の尊さを伝えていきたいという意見も出された。最終的に、新聞を通して「下級生に戦争の恐ろしさを伝え、平和の尊さに気付いてもらうこと」を目的とする意見にまとまった。

次に、目的を伝える方法について話し合った。表5は生徒の意見を集約したものである。主に3つの型に分類することができた。

表5 目的を伝える方法に関する生徒意見（集約）

A：直接警鐘型
戦争（被爆）による被害の大きさに着目し、同じ過ちを繰り返さないよう直接的に警鐘する。
B：間接警鐘型
Aと同じ目的だが間接的に警鐘する。
C：啓発型
被爆者が語った願いに着目し、よりよい社会形成に向け啓発する。

AとBは警鐘型である。戦争や被爆による被害の大きさを積極的に伝えることで、同じ過ちを繰り返さない警鐘としていく。Cは啓発型である。被爆者が語った願いをもとに、よりよい社会形成に向け啓発する。どちらも目的は戦争のない平和な社会の実現であるが、表現方法が異なる。生徒たちはグループごとに話し合い、どの表現方法で制作するか決めた。そして、新聞名と割付、見出しを考えさせた。具体的には、修学旅行で収集した情報から印象的な言葉をブレインストーミングの要領で書き出すよう指導した。そのうえで、伝えたい内容を端的に表し、下級生を惹きつける言葉を選ばせていった。

例えば、図2は直接警鐘型の新聞である。新聞名の「被爆実相新聞」や見出しの「人の痛み、醜さを知れ」

さを知れ」に表されているように、被爆の実相を直接的に表現する新聞である。このグループは、資料館の展示品と被爆者の講話を大きく取り上げるとともに、戦争被害を強い口調で伝えた方がよいと話し合い、見出しを考えた。

図3は間接警鐘型の新聞である。図2と同じ警鐘型であるが表現が直接的ではない。このグループは、間接的な表現の裏にあるメッセージを読み解いてほしいと考えた。一見すると青空新聞とは爽快な印象をもつ新聞名である。しかし、この青空とは、原爆が投下された1945年8月6日の広島を表している。早朝から青空が広がり、夏の日差しが強く照り付ける日だった。原爆投下前の平和な広島を青空に例えた。また、見出しには「耳を澄して」<sup>11)</sup>と表し、被爆者の声に耳を傾けるよう訴えている。直接的な警鐘の表現ではなく、読者を惹きつける工夫として生徒が考えた。

また、図4は啓発型の新聞である。新聞名を「平和発信新聞」とし、「広島はこれからも進み続ける」と大きく見出しを付けた。このグループは、特に次年度に修学旅行で広島を訪れる2年生を意識して見出しを考えた。広島という街の変化を見てほしいという願いが込められている。



図2 直接警鐘型の新聞（生徒作成）



図3 間接警鐘型の新聞（生徒作成）

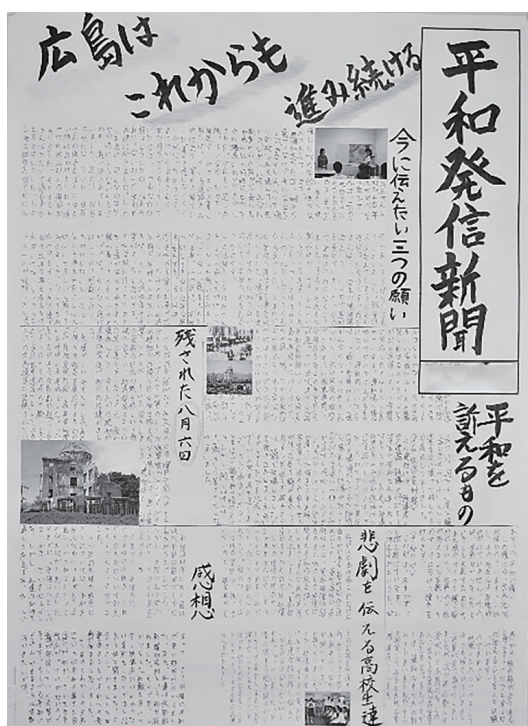


図4 啓発型の新聞（生徒作成）

戦後、広島は平和記念都市として復興を果たした。この街とともに、将来の平和について考えることを表した。そして、被爆者が語った願いを中心に構成した。被爆者の願いとは、①家族を大切にすること、②優しい心を持つこと、③自分の好きなことを見付けることであった。Aさんは次代を担う若者に期待を込め、①から③を伝えた。これらは直接的な反戦メッセージではない。しかし、ユネスコ憲章前文に「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」<sup>12)</sup>と記されるが、まさに生徒の心に平和の砦を築くメッセージだと言える。そして、生徒もAさんの意図を理解し、下級生の心にも砦を築くことを願って制作した。

#### ②新聞を活用した発表会の実施

制作後は、新聞を活用し下級生に向けて直接伝える発表会を実施した。発表は、ポスターセッション形式のため記事をじっくり読ませることは難しい。そこで、特に伝えたい記事を選び、その記事を中心に発表することにした。なお、発表会後には新聞は校内に掲示し、休み時間等に下級生が読むことができるよう配慮した。

発表会を位置付けたことで、生徒は執筆した記

事を見直す機会となった。事前に学級内で他のグループの発表を聞く時間を設け、下級生に伝わるか意見を述べ合った。教師による指導に加えて、生徒相互による意見交換は文章表現を見直す機会となり、より伝わりやすい言葉に置き換えるなど修正を加えていった。表6は発表を聞いた下級生の感想である。表中の下線部cは図2の戦争被害の大きさについて伝わり、下線部dは図4の被爆者の願いが伝わったことが分かる。

表6 発表を聞いた下級生の感想（2名）

生徒工
戦争や原爆は、 <u>c</u> とても恐ろしく残酷なものだと改めて感じました。(中略)二度と同じようなことは起きてほしくないと思いました。また、自分たちにできることは何か、考えることができました。
生徒オ
私は、学校に行けることはあたり前とってしまっている自分がいました。しかし、普通に生活することがあたり前ではないと感じました。 <u>d</u> 家族を大切にするなど、進んでやっていきたいです。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

本実践の成果を確認するため、制作した新聞をコンクールに応募した<sup>13)</sup>。第三者の評価を得ることで、新聞制作を通じた表現力育成を振り返った。審査の結果、約1700点の応募総数からX中学校の作品が2点入賞した。そのうち1点は上位入賞となった。第三者による客観的评价が得られたことは成果である。具体的に「平和に対する確かなメッセージが伝わってきた。大見出し、小見出しにも読み手に強く訴える言葉が溢れている」と記者からの講評を得た。生徒が新聞制作を通して伝えたいことが第三者にも伝わったと考える。

また、校内に1カ月ほど新聞を掲示したが、休み時間や放課後に自分たちで読み返し「この見出しはメッセージ性があっていい」「この文章は少し書き直した方がいい」など仲間と話し合う姿が見られた。新聞制作の目的意識が持続した表れであり、成果であると考えられる。

## (2) 課題

本実践は、修学旅行との関連を図った総合的学習での活動を展開した。しかし、さらに他教科との関連を図ることも考える必要がある。特に、技能面において、国語科指導の見地から表現技法など新聞制作の指導を見直していく。本実践の場合、見出し表現の工夫に取り組んだが、記事の書き方指導に対する指導が十分ではなかった。

また、新聞制作は小学4年生の国語科においても学習する。校種間の系統性も考慮することで、より相手意識と目的意識が明確となった新聞制作につながると考える。表現力の育成への期待ができる。今後の検討課題としていきたい。

## 6 結語

本実践は、総合的学習において修学旅行での感動体験から戦争の記憶を伝える新聞制作に取り組んだ。その背景には、戦争の記憶継承という社会課題をふまえ、学校教育においても生徒が考える必要があったこと。また、新聞制作を通して相手や目的に応じた表現方法を身に付けさせ、表現力の育成に取り組むことが求められた。

そこで、情意面と技能面の2つの側面から実践を構想し、取り組んだ。修学旅行での活動を通して、戦争の記憶継承という社会課題に対する当事者意識の醸成と新聞制作への動機付けを指導の重点とした。そのうえで、相手意識と目的意識を明確にして制作に取り組んだことで、読者に戦争の実相が伝わるとともに、表現力の育成を図ることができた。今後も戦争の記憶継承は、学校教育においても取り組むべき喫緊の社会課題である。学校での教育活動と関連付け、次代を担う生徒がこの課題に向き合い、平和な社会の実現に向けて取り組むことができる活動を考えていく。

## 注・引用文献

1) 柳井智美, 皆川直凡 (2017) 「感動体験に伴う感情が中学生の人的成長に与える効果の検討—自立, 協同, 創造の視点から—」, 『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』, No.15 (1), p.45.

2) 広島市では、被爆体験伝承者の養成事業を平成24年から実施している。

広島市HP (2025年4月1日閲覧)

<https://www.city.hiroshima.lg.jp/atomicbomb-peace/fukko/1021099/1015041.html>

3) 教育基本法(第一条)に「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と明記されている。

4) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)総合的な学習の時間編」p.70。

5) 文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説 総則編」p.1。

6) 一般社団法人日本新聞協会が運営するウェブサイトの「新聞を活用したデータベース」で検索すると、NIE実践校のなかで新聞制作学習に取り組んだ中学校は134件該当した。

7) 前掲書4), p.114。

8) 前掲書4), p.114。

9) 広島平和記念資料館HP (2025年4月6日閲覧)

[https://hpmmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=DocumentView&document\\_id=581&lang=jpn](https://hpmmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=DocumentView&document_id=581&lang=jpn)

10) 戸梶重紀彦(2004)「『感動』体験の効果について—人が変化するメカニズム—」, 『広島大学マネジメント研究』4号, p.32。

11) 正しくは「耳を澄まして」であるが、訂正前に撮影したため「耳を澄して」となっている。

12) 国際連合教育科学文化機関憲章(ユネスコ憲章) 文部科学省HP。

13) 2016年より岐阜新聞社は「かべ新聞コンクール」を主催し、表彰事業を行っている。

# NIE FORUM

NEWSPAPER IN EDUCATION

---

2025 No.4

## CONTENTS

### Practice Report

On Newspaper Production Study to Convey Students' Memories of the War through Their Moving Experiences on School Excursions

— While Fostering the Ability to Express Themselves—

..... Kentaro FUJII 1